9月８日の説教要旨　　「キリストに導かれて」　　奥村益良牧師

ペトロの手紙一 2 章 11～25 節

今日は聖書日課で中心聖句とされた箇所を取り上げました。この手紙は現在のトルコの北東部で黒海に面している地域にある複数の教会に宛てられた手紙です。その地方のキリスト教徒たちは当時のローマ皇帝ドミティアヌスの迫害を受けており、彼らを励ます目的で書かれています。鍵になるのは 25 節のキリストが「魂の牧者であり、監督者である」という言葉です。ここに焦点を当ててお話します。

この個所で特に強い印象を受けるのは、忍耐と服従を説いている所です。宛先の教会の構成員は非ユダヤ人で、奴隷の身分の人が多かったようです。自由を奪われたうえに、キリスト教に救いを求め、信じたら、今度は迫害を受ける、こんな理不尽なことはありません。こういう時古今東西、人はなぜ自分はこんな苦しみを受けなければならないのか、自分が何をしたというのかと考えるのが常です。それに対して本書は忍耐し、服従せよと説いています。このように言うのはまずキリスト教徒がこの世では旅人であり、仮住まいをしているものだからです。そして苦しみを忍耐するのはキリストが苦しみを受けられた、その足跡に続くことだからと言います。キリストは傷を受けることによってキリスト教徒を癒しました。つまり傷を受けることによって私たちを神の恵みに与る者にされました。だからこの恵みの中で生きることがキリストの足跡に続くことです。

この事は私たちが、直面している事態にどう対処するかを考える前に、自分はどこに立っているかとしっかりと確認することが必要だということです。キリストの十字架によって神の恵みの中にいることを自覚し、そこにしっかりと立つことです。そこで著者が勧めるのが 16 節の「自由な人として生きなさい」ということです。これは状況に縛られ、振り回されて考え、行動しないことです。そこで著者は、忍耐と服従を言いつつ、すべての人を敬い、兄弟を愛し、神を畏れること、義によって生きることを勧めます。状況にとらわれない自由を実現することは実際には難しいです。それは私たちには恐れ、心配、不安、恨みという感情があるからです。

ここで大事なことは今日の個所の最後の言葉です。「あなたがたは羊のようにさまよっていましたが、今は魂の牧者であり、監督者である方のところへ戻ってきたのです」。この方はイエス・キリストです。キリストは私たちを神の恵みの中に入れてくださっただけでなく、我々の魂の牧者、また監督者として共におられます。そのキリストが我々の羊飼いとして私たちを導いてくださいます。私たちが恐れや不安や心配や恨みに捕らわれます。その私たちをキリストは神との交わりを回復し、自由人として生きていくように導いてくださいます。感情に捕らわれ、振り回され、間違いを犯し、信仰から外れることもあるような歩みであっても、その私たちをキリストは捉え、導いてくださいます。キリストは正しくない者のために苦しみを受けてくださったのですから。私たちの信仰生活はキリストに導かれています。